

或る村では、おいしい食事を食べているのはスルタンだけだった。イブ・ナッシュュヤのおばあさんはとても貧しかったので、時々スルタンの家の裏に行き、スルタンのシチューのいい香りを利用して干し米を食べていた。

通りかかった人がおばあさんを見て言った。

「なんと、あんたはスルタンのシチューの匂いを嗅いで米を食べているのかい？」。

彼はそのことをスルタンに報告し、スルタンはおばあさんを金曜日に裁くことを決めた。スルタンはこう述べた。

「彼女は我々に、どういう理由で私の許可なしに、私のシチューの匂いで米を食べたかを話すだろう。金を払うか死ぬか、そのどちらかだ」。

スルタンは続けて言った。

「老婆よ、私のシチューに味がしなくなって一週間になる。料理人を変えたがそれでも味はかわらなかった。誰がお前に、私のシチューの匂いをかくことを許したのだ。金貨1枚を支払わなければ死罪だ」。

イブ・ナッシュュヤはおばあさんの負債を払うことを約束した。

「それでは、お金の方にします」。

「金が払われれば、それがお前のばあさんからであろうと、お前からであろうとどっちでもよい」。

イブ・ナッシュュヤはポケットから金を出してそれを投げると、地面に当たって音を立てた。彼はスルタンに言った。

「はい、これで私たちは帰ります。おばあさんの負債を払いましたから」。

「何だそれは！ 帰りますだと。私は金の音しか聞いていないし受け取っていない。音が金の代わりになんかならない」。

「それでは、私のおばあさんはどうやって、あなたのシチューを食べないで匂いだけ頂戴することが出来たのでしょうか！」。

スルタンは自分の非を認め、イブ・ナッシュュヤのおばあさんを放免した。